

子ども理解と視覚支援

——保護者及び支援者用体験型プログラムの開発——

加藤 弘美・神野 歩

1. はじめに

一般的に、幼稚園や保育園のロッカーに付けられた個別のマークなど、見るだけでわかる行動の指針となるようなものが導入されていることが多い。子どもたちにとってわかりやすい視覚支援とはどのようなものなのか。それを保護者や支援者が体験的に理解することはできないだろうかという疑問から、体験型プログラムの開発がスタートした。

その考え方の基になっているのは、主に、発達障害の子どもたちの支援プログラムや、TEACCHで用いられる構造化の概念である。内山（2006）の解説によれば、「自閉症一般に、目で見て理解すること、興味がある特定の事柄については理解しやすいこと、一度覚えたことはかんたんには忘れないなどの長所がある。こういった長所によって弱点を補うための工夫が構造化である（p. 19）」とされる。このようなことを参考に、プログラムの開発を進めていくこととなった。

そもそも、本プログラムは、南部地域療育センターそよ風における、発達相談事業の一環として考案されたものであった。プログラムの内容は、そよ風の発達相談事業に携わる職員が協働で開発したものであり、当初保護者支援プログラムとして実施していた。保護者向けセミナーとして実施していくにしたがって、職員間の共通認識として生まれたのが、視覚支援のポイントは、「目で見てわかること」だという点であった。これを重視して、全10項目からなる体験型プログラムが作成された。そして、実際に保護者向けセミナーと

して実施をしていくにしたがって、こうした視点は、子どもに関わる支援者すべてに必要なものではないかという考えに至った。そこで今回、愛知県立大学において、保育や子ども支援に携わる現職者を対象に、このプログラムの一部を実施し、その効果を検討した。

2. プログラム実施の目的・方法

子どもにとってわかりやすく（見通しがもちやすく）、成功体験を積み上げていけるような支援方法を考えていくにあたって、まずは子どもたちがどのように世界を理解しているのかを知ることが必要であろう。そこで、様々な形で提供される、視覚的な手がかりを利用する体験によって、「見てわかる」とはどのようなことかを実感することが第一の目的である。加えて、その体験を基に、子どもたちの生活に活かせる視覚支援を考えることを第二の目的とした。

その方法として、以下10項目の体験型プログラムを考案した。なお、今回愛知県立大学で実施したセミナーでは、10項目のうち、特に子どもの日常に身近な「お片付け体験」プログラムを中心的に行った。

以下、プログラム10項目の内容について詳しく説明をする。

- ①わかりにくい案内板
- ②手がかりのない教室
- ③描画伝達体験
- ④地図体験（目印なし）
- ⑤指示書による製作

- ⑥部屋とスケジュールの視覚化
- ⑦地図体験 (目印あり)
- ⑧部屋とスケジュールの視覚化
- ⑨海外での食事・トイレ体験
- ⑩お片付け体験

以上が、全プログラムである。

3. プログラムの内容

(1) わかりにくい案内板

このプログラムは、日常に溢れる案内表示を基に考案したものであり、セミナー会場までの案内表示を用いて、視覚支援のポイント、「目で見てわかる」とはどのようなものを体験する。初めての場所で目的地 (当日のセミナー会場) へたどり着くために、目印とする案内板を故意にわかりにくく書き表した。案内板の形状は、A4 版用紙に文字や矢印を印字してラミネートをかけたものである (図 1)。

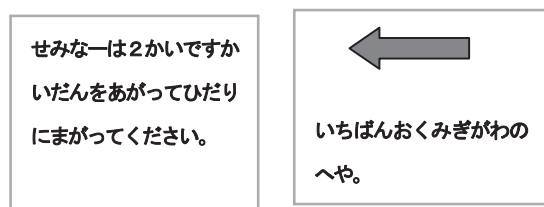


図1 わかりにくい会場案内図の例

なお、このプログラムの意図するところは、わかりやすさを目的とする表示であっても、その内容によっては、わかりにくく、混乱の原因にもなりかねないことを体験することにある。

(2) 手がかりのない教室

セミナーの会場内は、故意に机や椅子を乱雑に配置してある。そのため、参加者は、入室後どのように行動をすればよいのか (例えば、どこで待てばよいのか) わかりにくい。さらに。スタッフ全員、特に目印 (名札) などは身につけておらず、部屋のあちこちに散っているため、セミナー参加者は、どのように待機したらよいのか聞くことさ

えてできない。結局、参加者はセミナー開始の予定時刻まで、行動指針を持たないまま待つことを余儀なくされる。

このプログラム実施の意図は、見知らぬ場所や、慣れない環境の中で人が行動するときに、何を頼りにするのか、視覚支援の重要性を体験することにある。

(3) 描画伝達体験

一人に1枚 B5 版の白紙とペンを配布して、「この紙の上に、丸と三角を描いてください」と、指示をする。ほぼ、全員が描き終えたところで、「紙を裏返しにして、自分の書いたものを誰にも見せないようにしてください」と言う。次に、その状態のまま二人ずつのペアになってもらい、一方が他方に、両者とも自分の描いた図形を相手が再現できるように口頭のみで伝えるように指示をする。受信者は、聞いた通りに (想像力を働かせて)、自分が描いた用紙の裏側に、相手が描いたであろう図形をその位置や大きさも含めて再現することを求められる。

同じものを同じ条件で描く場合であっても、受信者によって、用紙のどの位置にどんな大きさで描くかはそれぞれであろう。このプログラムの意図するところは、自分だけが知っている内容を、他者に伝達するときに、視覚的な手がかりなしで伝えることがいかに難しいかを体験することにある。

(4) 地図体験 (目印なし)

A4 版の用紙に印刷された、白黒の地図を配布する。そこには、いくつかの通りと、その通りに沿って建物を彷彿させる台形や四角形が印刷されている (図 2)。用紙配布後、以下のような説明を行った。

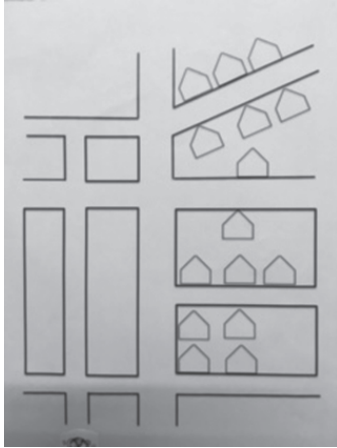


図2 地図（目印なし）

「今から素敵な隠れ家的カフェをお教えます。地図を見ながら場所を探し当てて、目印を付けてください。そのカフェは、次の大通りを右に曲がり、その次を左に、その次を右に行けばあります。」

ここで、参加者が地図をたどっている間に、スタッフが、次のプログラムを書いた紙を入れた封筒を配布する。ただし、この封筒は参加者全員に配るのではなく、故意に2/3の人のみに配布する。続いて、特に地図の内容には触れずに、「地図はその場に置いて、お配りした封筒の中に書かれている通りに行動をしてください。」と指示をする。封筒の中の用紙には、同じ指示内容が書かれているのだが、その書き方は3種類ある（図3）。どの指示書が入っているかは、封筒を開けて見ないとわからない。そして、封筒が配られなかった参加者たちは、指示内容を知らないために、周囲の人の動きを手がかりに、見通しのないまま移動をすることになる。

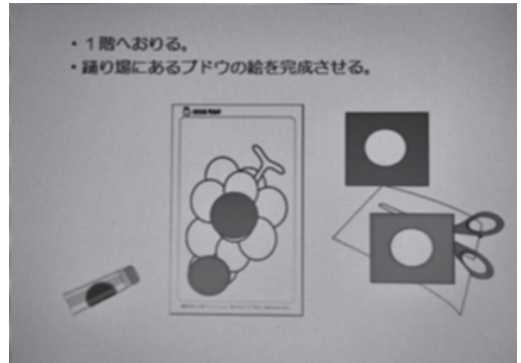
1. 1階へ下りる。2. 準備してある絵を完成させる。

a. 文字のみによる指示書

（実際に配布するものは、文字サイズを8ポイントにして読みやすくしてある。）

かいだんをおりて1かいへいく。おどりばにぶどうのえのかみとおりがみとのりがあります。ぶどうのえをできるだけはやくかんせいさせてください。すたつぶがむかえにいきますのでそれまでにかんせいさせてください。

b. かな文字のみ（行書）による指示書



c. 絵（ブドウ、折り紙、鋏）と文字による指示書

図3 実際に使用したいろいろな指示書

(5) 指示書による製作

移動先では簡単な制作ができるように、材料と道具を準備しておく。作業内容は、白黒のブドウの絵が描かれたA4版用紙に、折り紙を丸く切って貼り付け、ブドウの房を完成させるというものである。ただし、ブドウの房としては不適切な色の折り紙も置いてある。指示書ももらっていない

参加者は、作業内容が不明のまま周囲を見て、想像力を働かせて行動することを余儀なくされる。

このプログラム実施の目的は、スケジュールや行動の見通しがないままに、行動しなくてはならない場合に、どのような感情が生じるのかを体験すること。また、同じ指示内容であっても、その表し方によって、わかりやすさに違いがあることを体験することにある。

(6) 部屋とスケジュールの視覚化

参加者が製作のための指示書を持って退室した後、部屋の中に乱雑に置かれた机や椅子を規則的に並べ、本日のスケジュールを参加者から見やすい場所に提示する(図4)。また、スタッフは名札を付けて待機する。準備が整ったところで、参加者を再び部屋へ案内する。参加者は、配置の整った席に迷うことなく座ることとなる。

このプログラム実施の目的は、初めての場所であっても、行動の指標となる視覚支援がある場合と、ない場合では、心理的な安定の度合いが異なることを体験することである。また、スケジュールの視覚化の有効性も同時に体験することとなる。

<u>子どものわかったを体験しよう</u>	
10:00	開始
	描画伝達体験
	地図体験 その1
10:20	製作体験(場所移動)
10:20	地図体験 その2
	海外での食事体験
11:00	お片付け体験
11:40	まとめ

図4 スケジュールの視覚化

(7) 地図体験(目印あり)

(4) で使用したのと同じ地図に、色や建物の目印(例えば、〒マークや〒マーク)を付け、手がかりを多くしたものを配布する(図5)。そして以下のような教示を与える。「先ほど見つけたカフェをもう一度この地図で探してみましょう。では、ご案内します。そのカフェは、次の信号を右に、郵便局のある交差点を左に、公園を右に行けば銀行のとなりにあります。」「さて、見つかりましたか? カフェは先ほどの地図で見つけた場所と同じでしたか?」

ほとんどの参加者は、目印のない地図上で探して当てた場所と、目印のある地図上で探した場合とは異なる位置にたどり着くことになる。この地図体験プログラムの目的は、情報を共有する場合に、視覚的な情報提示がいかに有効な手段になるかを実感することにある。



図5 地図(目印あり)

(8) 海外での食事・トイレ体験

このプログラムでは、海外旅行に行ったときを想定して、参加者にいくつかの体験をしてもらう。まず、以下のように教示する。「さて、皆さんは週末を利用して、韓国へ旅行に出かけました。仕事が終わって急いできたので、現地に到着すると

お腹が空いてきました。さあ、韓国のお店で食事をしましょう。あなたなら、どの看板のお店に入りますか?」。教示に続いて、4種類の飲食店らしき看板の写真を同時に提示する。どの看板にもハンゲルの文字が書かれており、手がかりはその文字と看板の色など限られた情報だけである。

参加者全員が店を選んだことを挙手によって確認する。その後で数人に、「なぜその店を選びましたか?」と質問をする。

次に、同じ看板の写真に英語の表記や店のメニューの写真など、視覚的な情報が追加された写真を提示する。提示の仕方は、初めと同じで、4枚同時に示す。そこで、「さあ、この写真だったらどこを選びますか?」と、再度質問をする。写真の店ごとに、自分がどれを選択したか挙手を求める。それに続いて、「先ほど選んだ店とは違う店を選んだ方は手を挙げてください」と、言う。

このメニュー体験に続いて、トイレ体験を実施する。その内容は以下のようなものである。導入のセリフとして、「さあ、食事に美味しいお酒をいただいて、トイレに行きたくなってしまいました。」この説明と同時に、トイレを表す文字（日本人にとって馴染みのない語）の書かれた2種類の看板の写真を提示する。それを提示しながら、「さあ、あなたならどちらへ入りますか?」と質問をして、どちらか一方の選択を奨める。その後で、「なぜそちらを選びましたか?」と質問をする。

次に、2つの文字表記に男性用トイレ・女性用トイレのマークを付加したものを再提示する。参加者は、それを見ることによって、自分が先ほど選択したトイレが適切であったかどうかを確認することになる。

これに続いて、世界各国のトイレマークを紹介する。そこには、文字と一緒にイラストが描かれており、そこに視覚情報としては重要な共通性があることが確認できる。参加者は、このプログラムを通して、聴覚情報が頼りにならない場合には、視覚的な情報がいかに有効かを体験することになる。

(9) お片付け体験

このプログラムは、各3~5人のグループに分かれて、片付けの視覚支援の方法を考えるものである。各グループの机の上に、文具や玩具の入った30cm×20cm×5cm大の四角い籠を置く。少し離れた場所に設置した別のテーブルには、空き箱やシール、セロファンテープを置く。これは、片付けを構造化するために参加者たちが使用するものである。各グループメンバーが位置についてところで、以下の指示でプログラムを開始する。「では、子どもたちの遊んだ後の部屋を再現してみましょう。」そう言って、机の上に置かれた籠を逆さにして、その中身を机の上に乱雑に広げる。続いて、「さあ、お出かけするから片付けてね」と指示をする。

参加者たちが、机の上の物を籠に戻し始めたところで、スタッフが各グループの机を回りながら、故意に「違いますよ。そうではなくて、ちゃんと片付けてね。はやく、はやく。いつも言っているでしょう。」など、子どもを叱るような言葉をかける。そして、「もう、もう一回やり直してね。」と言い、たった今片付けたばかりの籠を再びひっくり返す。この思いもしない状況に参加者がとまどっているところで、スタッフから一連の指示内容の意図を以下のように説明する。

まず、「ちゃんと」「はやく」という言葉は、大人が子どもによくかける言葉であること。しかし、指示内容としては、明確な基準がなく、曖昧であること。それが、たった今体験した状況であることを確認する。

【場面A】 その後で、「では、子どもたちに“片付けてね”と言っただけで、元通りの位置に片付けてもらうためにはどうしたらよいでしょうか。今度は、片付けのための環境調整をしていただきます。あらかじめ準備しておいた空き箱や、セロファンテープなどを使用して片付けの視覚支援を実行してください。」と言う。参加者たちは、グループメンバーで話し合いながら作業を進めていくことになる。

【場面B】 各グループが、片付けの環境調整を

考えながら、片付けを終えたところで、スタッフは再び各グループの机を回り、籠の中身を机の上に乱雑に広げる。その後、グループごとに、他のグループと場所を交換する。各グループが位置についてのを確認してから、スタッフが「さあ、お出かけするから片付けてね。」と指示をする。

このプログラム実施の目的は、自分たちの考えた片付けのルール（視覚支援）が、どの程度有効であるかを体験することである。特に、視覚化に重点をおいた環境調整をする前と後との比較によって、片付けやすさを体験することができる。また、他者の考えた視覚支援を体験することによって、配慮点や工夫点に新しい視点を見いだせるのではないかと考える。

4. 保育者・支援者向けワークショップ（愛知県立大学）

今回、愛知県立大学では、主として、支援者を対象として療育セミナーを実施した。第Ⅱ部「支援体験ワークショップ」において、以下のプログラムを実施した。③描画伝達体験、④⑦の地図体験、⑨海外での食事・トイレ体験、⑩お片付け体験。

参加者は、25名であった。セミナーの受付時に、「お片付け体験」の際のグループ名を伝えておいた。

(1) 描画伝達体験

3 (3) で説明したプログラムを実施した。

(2) 地図体験

3 (4) (7) で説明したプログラムを実施した。

(3) 海外での食事・トイレ体験、

3 (8) で説明した内容を実施した。参加者たちは、視覚情報の多さ、わかりやすさによって、選択が変化することを実感してもらった。

(4) お片付け体験

前のプログラム終了後、あらかじめ設定しておいた【Aグループ】、【Bグループ】、【Cグループ】、【Dグループ】の机に、グループごとに分かれてもらった。続いて、3 (9) で説明したプログラムを実施した。

以下、セミナー当日の内容についてプロトコルを用いて報告する（枠で囲った箇所はプロトコルより抜粋）。

以下、【S】 スタッフ

【A～D-1～6】 参加者

【場面 B ①】 各グループ、片付けがスムーズにいくような視覚支援を考える。その後、他のグループとテーブルを変わってもらい、実際に片付けをしてもらった。

その後、スタッフが各テーブルを回って確認をすると、A～Cグループの机の上は片付いているのに、Dグループの机の上には、まだたくさんの道具が散乱していた（図6参照）。



図6 イメージ写真（当日撮影）

【S】 皆さん、子どもたちはお母さんが思った通りに片づけてくれていますか。Aグループ、素晴らしい、Bグループも素晴らしい。Cグループ、ちゃんと片づきました。Cグループのお母さんたち、子どもはちゃんと片づけましたか。素晴らしい子ね。早く、気持ちよく出かけられますね。Dグループのおうちの子はどうしましょう。あら、Dグループはみんな出しっ放しでお出かけするみたいです。Dグループが片づかなかった要因は何でしょうか。聞いてみましょう。

以下、【D-1～3】Dグループメンバー

【D-1】印がないね。
【S】印がない。何の印ですか。
【D-2】それぞれの、車、ペン、はさみとか、置く場所が指定されていない。
【D-3】仕切りはあったんだけど、どこに何を置くか、明確な印がないですね。
【S】仕切りはあったけれども、どこに何を置くか、明確な印がないんですね。

【場面 B②】ここで、Dグループのメンバーが、急いでペンの入っている箱だけに印を付けた。

【S】なるほど。ペンは“ペン”と書いてあったから、いつもの居場所がはっきりわかったのですね。そうです。いつもの居場所がないモノたちが部屋に散らかったままです。

じゃあ、他のグループの皆さん、いつもの居場所というのはわかりましたか？文字で書いてくださっているチームもありますし、絵が上手な先生がいて、絵で描いてあるところもあります。お子さんが得意な、わかりやすいものを使って、文字や絵で居場所をはっきりさせるのは、とてもいいと思います。

最近では、スマホがあります。スマホで片付けの完成形を写真に撮ってそれを貼る。結構これは便利です。写真を貼ると、この通りに戻せばいいというのがわかるので。保育園の先生たちが、完成形を写真に撮ってそれを棚に貼っているのはよく見かけます。完成形を一度、写真に撮って貼ると手間がかかりません。絵を描かなくていいですし、文字を書かなくてもいいと思います。こういう体験も、お母さんたちにもしてもらおうと、おうちの様子が手にとるようにわかることがあります。

(5) ワークショップのまとめ

実際の体験に続いて、写真などの資料とともに、以下のようなワークショップのまとめを行った。

【S】このセミナーは、当初「子どものわかった！を体験しよう」という名前でやっていました。セミナーのそもそもの目的は、お子さんにとってわかりやすいとはどういうことかを、保護者に体験的に理解してもらうことです。

人間は、視覚情報に非常に頼っています。

人にわかってほしいことは、視覚的な情報に置きかえると有効だということをお母さんたちにもわかってもらおうという意図で考えたセミナーです。

ただし、何でも見える形にすれば伝わるのかというと、やはりそこは注意が必要だと思います。

5. 視覚支援のポイント

～プロトコルを基に～

では、実際の生活の中で視覚支援を行う際に、注意すべき点は何であろうか。視覚支援の事例とポイントを以下のように説明した。

【例 1 和式トイレの使い方説明図】

見てわかる情報って町中にあふれているんですけど、例えば、こういう説明、学校とか幼稚園とかでもよくあると思います。

トイレの使い方ですね。和式のトイレ、最近では、あまり見かけないんじゃないかなと思うんですけど、和式のトイレにこんなふうに足のマークとかをつけてみる。これも目で見てわかる伝え方の1つだと思います。



【例2 歯ブラシ】



例えば、これは、歯ブラシです。歯ブラシそのものを見せて、歯を磨くことを伝えたいほうがわかりやすいお子さんもいらっしゃるでしょうし、写真のほうがわかりやすいお子さんもいらっしゃるでしょう。イラストもあります。支援者側は、これを見たらわかるだろうと思って提示をしますが、お子さんがほんとうに歯ブラシ全体を見ているかどうかはわかりません。持ち手など一部だけに注目したら何だかわからなくなりますし、そのお子さんの年齢、発達段階などにあわせた視覚支援をすることが大切だと思います。

【見てわかるポイントとは？】

何でもかんでも見える形にすれば良いというわけではありません。

例えば、朝のスケジュールの視覚化という目的であっても、たくさん方法があります。時系列で並べたらどうなるのかとか、いろいろな工夫ができると思います。並べてみるとか、時間を書いてみるとか、そんな工夫も有効だと思いますし。

【例3 スケジュール】

これは1日のスケジュールです。これを利用しているお子さんは、この形が一番わかりやすいのです。月曜日はこれとこれをやりますという、こんな形で、スケジュールをいつも見ながら生活をしているという方もみえます。その人その人のわかりやすさがあるのではないのでしょうか。



【例4 視覚支援を利用した

コミュニケーションツール】

コミュニケーションの手段として視覚的なものを使うやり方もあります。これは、あるお母様が作ったものですけれども、台紙にマジックテープでカードが張ってあります。食べ物ですか、そのお子さんが生活の中で使っているようなものが貼ってあって、これをお子さんがコミュニケーションの手段に使うというものです。



【視覚支援は誰のため？何のため？①】

お子さんにとってわかりやすい、子どものための視覚支援ということで、その子にとってわかりやすい支援グッズを考えるということもとても大切だと思います。繰り返しになりますが、お子さんの年齢や発達の状況も考慮することが大切だと思います。当たり前ですが、文字の読めないお子さんに、文字カードを使用する人はいないと思いますが、それじゃあ、目で見る写真やイラストを使おうというときにも、実物なのかイラストなのか写真なのか、どの情報が一番そのお子さんにとってわかりやすいのかを考えることも、ポイントの一つだと思います。

【視覚支援は誰のため？何のため？②】

よくある質問に、「活動から活動に移るときになかなか動けなくて困っています」とか、「切りかえが悪くて困る」というものがあります。

既に、カードなどの視覚支援を使っている方もいらっしゃると思いますが、それでも何かうまく伝わらない。「カードを使ってみましたが、うまくいかなくて」という質問もよくあります。

この質問から、「誰のためのカードなのか？」、「何のためのカードなのか？」という疑問が出てきます。カードを使っている先生のためのカード、そのカードを使うことによって子どもに動いてもらう目的で作っていませんか？

これは、視覚支援の目的からちょっと外れてくるのではないのでしょうか。何のための、誰のためのというところは重要なポイントです。

「カードを使ってもうまくいかないんです」とおっしゃる例で一番多いのは、カードをお子さんに見せて、例えば、「トイレに行きます。」というような指示をしているのですが、お子さんは見向きもしてくれません。

視覚支援グッズというのは、指示をするためのものではありません。子どもが、「わかった」と思える、そのためのものであって、決してそのカードや視覚的なものを使って、動いてもらうための物ではありません。見てわかるための物だということこそ最も大切なポイントだと思います。

6. 質疑応答とまとめ

本プログラムは、当初保護者支援プログラムとして考案された。今回、支援者を対象に実施したのだが、以下の質疑応答の内容やその他参加者の感想から、支援者全般に役立つプログラムだといえるのではないだろうか。

以下に、プログラム終了後の質疑でのやりとりを示す。

【Aさん】 保育士（児童デイサービス勤務）

ゲーム（椅子とりゲームなど）をすると、発達凸凹のある子どもたちがほとんどで、負けるとすぐ泣いたりパニックになったりするのです。そうではなくて、例えば椅子とりゲームで負けたら、コーナーがつくってあって、マット、部屋の壁際に視覚支援で、文字と顔のマーク、悔しいとか、また次頑張るとか、もうやらないとか、文字と顔のマークとかで、視覚支援をしているのですが、それも効果があるのかなと思っていますが、どうでしょうか？

【スタッフ】

多分、正解はないですね、きっと。そのときの状況や、お子さんの状況によって、その場に適切なやり方というのがあるのではないのでしょうか。悔しいとかという気持ちを言葉や絵で表現して確認するというのは、よい方法だと思います。

【Bさん】 児童福祉施設心理士

お子さんに初めて視覚支援を導入するときには気をつけていることが、さきほどお話にもありましたが、まず、スケジュールなりカードなり、子どもが興味を持って見てくれないと意味がないので、その子が好きな活動をまずスケジュールとかカードにします。まずは、それを使ってスケジュールの見方や、カードの使い方を教えるということをしします。見てわかるというのは大事ですが、わかったからといってその通りに、その方向を見ようとか、それを活用しようとかということに必ずしもつながらないのではないのでしょうか。先ほどの話ともつながるのですが、職員側がやらせたい

活動や、義務としてやっているルーティンとか、着がえがなかなか苦手な子が、着がえの場面からいきなりスケジュールで提示しても、やっぱり子どもとしてモチベーションが上がらないのではないのでしょうか。おやつとか、その子の好きな活動からまずスケジュールで見せてあげることが大切だと思います。まずは、スケジュールやカードを見ると、いいことがあるという、そういった流れで導入するようにしています。

【スタッフ】 導入の仕方、とてもいいヒントがもらえたと思います。

【Cさん】 特別支援学校教員

今のお話で、自分もそうだと思うところがありました。特別支援学校では、カードを見るときにカードに意味を持つという発達段階に到達していないお子さんもたくさんいます。そういうお子さんに対しては、やはり現物というか、実物での指示のほうがいいのか、自分も子育てをしていて感じるんですけど、親の言葉よりも実物のほうが言うことを聞くということがあります。例えば、どれだけお風呂に行くぞと言って聞かなくても、お風呂で遊ぶおもちゃをぽんと1つ渡すだけでお風呂にぴゅーっと行く息子を見ると、がっかりみたいところがあるんですけど、やっぱりそういうふう子ども自身がその場で使っている物とかからスタートするというのは、よく自分も支援をするときに使います。

また、自分の関わっている子だと、見ることに難しさがある、見えない、見えにくいというお子さんもいらっしゃって、そういう子どもたちには、視覚以外の感覚、触覚、触れてわかるカードや、盲学校ではよく自分の下駄箱とか自分のロッカーに触感の違うもの、それぞれ全部違うものが張ってあります。自分のものはこの触感というのがありますが、肢体不自由でもやはり感覚的に、どの感覚が一番伝わりやすいのかというのは気をつけて見たいと思いつながりながらやっています。後は、匂いとか、その人の匂いとかその人の声とか、毎回同じ歌をうたってくれる先生とか、そういうもので物や、人や場所がわかるという、そういう伝

え方をしている先生もよくいらっしゃいます。

【Dさん】 主活動に入っていないお子さん、そこにはまだ興味がないとか、そういうときに、あるいは切りかえが難しいときに、もちろんカードを見て切りかえられるということもあるんですけど、そうではなくて、子どもの関心がそこになく、などは、どのようにしたらいいのか結構悩むところだと思います。保育者の人数や、体制の問題として、個別的なことをいろいろやらせてあげられる状態があるのかなのかということによっても対応は変わってくると思うんですが、主活動と個別の活動の関係ということ、具体的に教えてください。

【スタッフ】 教室の中で主活動しようというときに、やっぱり外に出ていってしまうお子さんとかがいると思います。そのようなとき、その子どもがどうしても行きたい場所はないか。例えば、ある子が保育中に部屋を出て給食室の前へ行ってしまうということがありました。多分給食のいい匂いを嗅ぎに行きたいとか、もう食べたいなという気持ちもあって、そこへ行っただと思います。そのときは、たまたま職員の体制がよかったので、給食室の前で一人職員が付いて、そこで主活動をするということをしました。やる場所はその子が選んでもいいけれど、でも活動はこちらの選ぶことを一緒にやってみようよというような形でやっていたことがあります。

また、お子さんの状況によって、例えば、ふさふさした触感が好きな子どもであれば、ふさふさした物を握りながら主活動と一緒にやるとかいう方法もあります。逆に、ちょっと苦手な感覚、例えばたわしの感覚も、一緒にやってみようよと言って、たわしを持たせたりとかというように、苦手なこともやりながら、でも、こっちはのうがやっぱりよかったねということを保育者と共感する経験も大切にしています。楽しかったねということが経験できるように、私たちもその子その子に合わせて支援を考えるようにしています。

7. おわりに

セミナー終了後、参加者からは、「うちの施設でもこのプログラムをやってみたい」という前向きな意見が多く聞かれた。この言葉からも、このようなワークショップを求める支援者は、多いのではないかという可能性が見えてきた。今後、このプログラムを研鑽して、より多くの支援者と共有していくことが期待される。

文献

内山登紀夫. (2006). 本当の TEACCH—自分が自分であるために. 学習研究社.

付記 本稿は2016年9月3日に行われた、愛知県立大学生涯発達研究所主催の「幼児のための療育セミナー」(発達障がいフォーラム)での講演をもとに、加筆・修正をした。原稿作成にあたっては、愛知県立大学教育福祉学部山本理絵教授に協力をえた。